ICU 日本語教育研究 19：pp.55-66　研究ノート
©2022 国際基督教大学　グローバル言語教育研究センター

「日中同形同義語＋を＋和語動詞」の習得に及ぼす母語の影響
―中上級レベル中国人日本語学習者の場合―

張　名瑶

1. 先行研究のまとめ

動詞の習得は日本語学習者にとって、非常に重要な学習項目の一つである。中国人日本語学習者の場合、漢語は使い慣れているため、日本語の動詞を用いる際、漢語動詞（サ変動詞、例：研究する）に頼る傾向があることが指摘されている（鷲見，2014）。そのため、これまでは漢語動詞に関する研究は多かったが、和語動詞の習得に関する研究は少なかった。近年、中国人日本語学習者が漢語動詞に頼りすぎることにより、和語動詞の習得が十分に進まない可能性が示唆されている。和語動詞を対象にした研究としては、母語の転移と習熟度との関係（小森，2014）、文脈における既知和語動詞の産出（森山，2015）、コーパスによる和語動詞の使用状況分析（鷲見，2014）が挙げられる。三つの研究は、すべて中国人日本語学習者が和語動詞を習得する際の困難さを明らかにしている。また、母語による影響も示唆されている。小森（2014）では、日本語の和語動詞が中国語の漢語動詞と異漢字の場合、例えば、日本語の「会社を起こす」とそれに対応する中国語の［设立公司］[1] の場合、中国語の漢字を用いた和語「設けた、立てた」が選ばれる傾向が確認されている。森山（2015）では、中国語や意味からの連想による誤り（例：「* 赤ちゃんが夜中三時に生きた」、正解：「起」）（* は非文を指す、以下同様）や弱い共起関係 [2] による誤り（例：「* 家に資料を置けてもらった。」、正解：「届」）が示されている。また、鷲見（2014）では、「* ガラスが破れる（中国語では［玻璃破］）のように、「やぶれる」の意味の適用範囲を十分理解できないことに起因する誤りが指摘されている。

しかし、まだ課題が残っている。まず、鷲見（2014）と森山（2015）では、和語動詞を文脈の中に入れて分析し、小森（2014）でも連語という形式で和語動詞の習得を考察しているが、和語動詞と共起する語については着目されなかった。特に、中国語の動詞が和語動詞コロケーションの習得に及ぼす影響を考察する際には、自他動詞を別々に検討するか、自他動詞を対照的に考察する必要がある。例えば、他動詞だけを分析対象として、共起する語も名詞のみであり、意味や形も同じである「日中同形同義語」にすると、和語動詞との共起語を統制しながら、漢字だけの影響を考察することが可能である。

また、和語動詞のコロケーションの習得において、学習者の中国語の動詞による影響を軽減させるためには、その影響の要因が何かを検討することが重要である。近年、コーパスを用いたコロケーションの習得に関する研究が多く、コロケーションの使用頻度が、コーパスによるコロケーションの研究における重要な指標の一つとなっている。もし使用頻度と習得に関連があるとすれば、使用頻度の高いコロケーションは学習者が必然的に習得すると考えられるため、特に使用頻度の低いコロケーションに注目して教えるこ

とが習得に有効であろう。学習者の作文コーパスにおけるコロケーションの使用頻度と習得に関する分析は、先行研究でも見られる（劉，2017）が、学習者が文章を書く際、自身が使い慣れた日本語の表現のみを使用し、使い慣れない表現は避ける傾向にあるため、日本語の全体像を把握するコーパスを用いて、コロケーションの使用頻度と習得の関係を検討することが課題として残る。また、学習者の第二言語能力のレベルが習得に与える影響については、作文データを対象として、英語習得での研究では学習者の英語能力が高くなっても誤用率は低くならないと結論付けられており（Laufer & Waldman, 2011）、日本語習得での研究では、日本語習熟度が上がるにつれて、正答率が高くなる傾向があることが指摘されている（小森，2014；森山，2015）。また劉（2017）は、日本語能力が上がるにつれて誤用率は一度増加するが、その後ある程度のレベルに達すると減少する傾向にあると結論付けた。両者は少々異なる研究結果となっているため、調査対象を広げてさらなる調査を行う必要がある。

本研究は、和語動詞のコロケーションの習得について、「日中同形同義語＋を」との共起の際に、中国語による負の転移について検討し、その負の転移[(3)]はどのような要素に影響されているかについて考察する。なお、本研究の和語動詞は、森山（2015）の定義を用いた上で、鷲見（2014）のデータ処理作業を参考にし、「見る」、「読む」のようなこれ以上小さな単位に分けることができない単純語に絞る。なお、敬語表現、受身動詞、使役動詞、補助動詞は除いた。また、小森（2014）の研究を参考にしながら、学習を促進する正の転移より、負の転移の方が多いと考えられている日中異漢字和語動詞のみを考察対象とした。一方、「日中同形同義語」は文化庁（1978）にならい、日中両国語における意味が同じか、または、極めて近いもの（例:「態度」→［态度］、「疑問」→［疑问］、「音楽」→［音乐］）と定義する。また、許（2014）の調査の結果によると、日中同形語のうち、二字の同形語の割合が多い（約 93.98%）ため、本研究の対象項目は、二字の同形同義語に絞った。

2. 研究課題・仮説

本研究では、次の二つの研究課題とそれに付随する仮説を設定する。

研究課題Ⅰ：中国人日本語学習者が「日中同形同義語＋を＋和語動詞」のコロケーション（例：「音楽を流す」→［播放音乐］）を習得する際に、中国語の動詞の漢字による負の転移が認められるかどうか、また、認められる場合は、どのようなパターンがあるか。

仮説 1：小森（2014）の結果から類推して、中国人学習者は同形同義語の場合、和語動詞に中国語の漢字を用いる傾向がある（誤用例：「* 話題を提げる」、誤用の理由：中国語で［提出话题］）。

研究課題Ⅱ：コロケーションの使用頻度（本稿では、コーパスにおけるコロケーションを含む例文の数を指す）、学習者の日本語能力は、中国語の動詞の漢字による負の転移に影響するか。

仮説 2：「日中同形同義語＋を＋和語動詞」の使用頻度が高い場合、コロケーションが学習者にとって馴染みがあると想定されるため、正しい答えを選ぶ可能性が高いと考えられる。そのため、母語の漢字による負の転移はコロケーションの使用頻度が低い場合より少なくなる。

仮説 3：小森（2014）と森山（2015）の日本語習熟度と正答率の研究結果から類推して、学習者の日本語レベル（日本語能力試験を判断基準とする）が高いと母語による負の転移は少なくなる。

3. 調査の概要

3-1 協力者

以上の仮説を検証するために、筆者は 2020 年 9 月と 10 月、日中両国の大学、大学院に在籍している中国人日本語学習者を対象に、オンラインビデオ会議の形式で、質問紙調査を行った。具体的には、日本の大学、大学院 10 校に在籍している中国人日本語学習者 30 名、または中国の大学、大学院 10 校に在籍している中国人日本語学習者 81 名に実施した。学習者の日本語能力試験のレベルは N2 レベル（以下、中級学習者と表記）、N1 レベル（以下、上級学習者と表記）である。

また、111 名の協力者のうち、追加のインタビュー調査に参加した協力者は、日本の大学、大学院に在籍している中国人日本語学習者 4 名、中国の大学、大学院に在籍している中国人日本語学習 7 名の合計 11 名である。そのうち、中級学習者は 5 名、上級学習者は 6 名いる。

3-2 質問紙

2020 年 1 月と 2 月に行ったパイロット調査の結果 (4) を踏まえて、質問紙を作成した。質問紙の作成手順は、以下の通りである。

（1）日韓中（越）同形二字漢字語データベース (5) を用いて、熊・玉岡（2014）の論文にある 1,383 語の日中同形二字漢字語の対応関係・品詞別一覧と逐語を照らし合わせ、日中ともに名詞の意味がある同形同義語 344 語を選定した。

（2）「日中同形同義語＋を」というキーワードで、NINJAL-LWP for BCCWJ（以下、NLB と表記）(6)、NINJAL-LWP for TWC（以下、NLT と表記）(7) コーパスで検索し、協力者の負担を考え、共起関係が高いコロケーション（MI スコア (8) が 5 以上、使用頻度が 10 以上）を選んだ。

（3）日中同形同義語の語彙レベルを日本語能力試験に対応するレベル (9) ごとに整理し、北京語言大学が開発した BLCU Corpus Center（以下、BCC）コーパス (10) を参照し、中国語と異漢字の和語動詞コロケーションを選んだ。本研究では、和語動詞の語彙レベルが日本語読解支援システムの『リーディング・チュウ太』で調べた。また、基本的に NLB より使用頻度が高い 100 前後のコロケーションと、使用頻度が低い 30 前後のコロケーションのそれぞれ 12 種類に絞った。

（4）手順（3）の条件以外のコロケーションも逐一分析し、筆者の判断により、中国語母語話者として混乱する可能性が高いと考えられるコロケーション 18 語に加え、42

語を選定した（表 1）。

(5) NLT と NLB コーパスの例文を参照に、質問紙を作成した。

表1　研究対象の「日中同形同義語＋を＋和語動詞」

財産を築く	生活を築く	機会を広げる	地位を築く	負担をかける	関係を扱う
人生を生きる	責任を果たす	電話を終える	生活を送る	話題を振る	議論を重ねる
戦争を戦う	社会を担う	機能を果たす	経験を重ねる	学校を出る	目的を果たす
話題を呼ぶ	距離を詰める	歴史を歩む	態度を崩す	時間を食う	電話を入れる
疑問をぶつける	関係を作る	人生を捧げる	負担を免れる	音楽を流す	原因を作る
会議を重ねる	経験を踏まえる	問題を捉える	対策を練る	学校を去る	生活を脅かす
機能を営む	社会を作る	機会を作る	条件を揃える	問題を扱う	時間を潰す

質問は合計 42 問の選択式問題である。各質問は目標項目の「日中同形同義語＋を」が含まれている文であり、文中に括弧があり、一番正しいと思う和語動詞を協力者に選択させる。正答以外の選択肢は原則として、中国語で同じ意味で共起する動詞、または正答の和語動詞の類義語動詞を選んで作成した（図 1 は質問の例）。中国語で同じ意味で共起する動詞を設定した理由は、共起する名詞が同じ場合、中国人日本語学習者が中国語動詞を選ぶ傾向があるかを検証し、中国語の漢字による負の転移を考察するためである。

この薬は胃に負担を（ ）。

A. かける　B.足す　C.作る　D.加える

図1　質問の例

3-3　調査の実施

調査は新型コロナウイルスの感染防止のため、オンラインビデオ会議の形で行った。中国にいる学習者は Tencent VooV meeting というソフトウェアを用いて、日本にいる学習者は Zoom meeting というソフトウェアを利用した。形式は一対一、一対多である。筆者が二つのバージョンのパワーポイントを用意して、3 名以下の協力者の場合、質問

を 1 問ずつ呈示した。3 名以上の場合は、時間をコントロールするために、3 問ずつ質問を流した。基本的に 21 分（30 秒 / 問）と定めたが、個人差や、ネットの繋がりなどの要素を考慮し、実際の調査時間は 14 分～ 28 分 / 名となった。

一方、一対一の場合、質問紙を用意し、協力者が時間内に口頭で回答し、筆者が同時に記入する形式で実施した。一対多の場合、事前にソフトウェアのチャット機能をプライベートチャット機能に設定し、協力者に時間内に答えを入力させた。また、同意を得て、調査の過程を録音録画した。さらに、全員が回答した後、プライベートチャットで、「質問紙の難しさやその他の感想について、もしあれば、簡単にコメントしてください」と依頼した。

4. 結果

本研究では、得られたデータをマイクロソフト Excel と統計ソフトウェア IBM SPSS Statistics 26 を用いて分析を行った。各課題の結果を述べる前に、まず、全体的な結果について報告する。111 名の協力者の平均正答率は 40.97% であった。また、「質問紙の難しさやその他の感想について、もしあれば、簡単にコメントしてください」というプライベートチャットでの意見の集約の結果、52.6% の協力者（上級：26 名；中級：15 名）が、質問が難しいとコメントした。次に、課題ごとの結果を述べる。

4-1　母語の漢字による負の転移（課題Ⅰ・仮説 1）

「日中同形同義語＋を＋和語動詞」の習得における中国語漢字による影響を検討するために、協力者の誤答の種類、各種類の平均誤答率、または各種類の動詞の平均選択率、協力者のインタビューのデータによる誤用の理由について分析した。

その結果、中国語の動詞と同漢字の和語動詞（例：［尽責任］→「* 責任を尽くす」）や（［播放音乐］→「* 音楽を播く」）など、日本語に訳す際に類義語である漢字の動詞を使う誤用（例：［承担責任］→「* 責任を担う」）や［挨近］→「* 距離を近づく」）などが見られた。また、同漢字の平均誤答率は 24.3% であり、類義語の平均誤答率は 34.73% であった。また、両者の合計は 59.03% であり、正答率の 40.97% より多かった。

また、中国語で同じ意味を表す際に、中国語の漢字の動詞が選択された比率の平均は 24.3% であり、そのうち、最低比率の 1.8%（「* 地位を留める」、正答：「築く」）に対して、最高比率は 82.88%（「* 財産を積む」、正答：「築く」）である。表 2 に示されているのは、和語動詞の代わりに中国語の漢字が選ばれた比率が比較的高い（平均の 24.3% より大きい）質問 20 問である。その 20 問は全体の 47.6% を占めている。

表2　中国語の影響による誤用（選ばれた比率降順）

質問番号	正答	誤答	誤答率
1	財産を築く	* 財産を積む	82.88%
35	学校を去る	* 学校を退ける	45.95%
8	責任を果たす	* 責任を尽くす	45.05%
28	負担を免れる	* 負担を避ける	44.14%
31	会議を重ねる	* 会議を復する	40.54%
23	時間を食う	* 時間を耗る	39.64%
30	原因を作る	* 原因を成す	39.64%
25	疑問をぶつける	* 疑問を提げる	37.84%
9	電話を終える	* 電話を掛ける	35.14%
21	歴史を歩む	* 歴史を過ごす	35.14%
38	社会を作る	* 社会を建てる	33.33%
18	目的を果たす	* 目的を成す	32.43%
27	人生を捧げる	* 人生を奉る	32.43%
33	問題をとらえる	* 問題を解す	31.53%
7	人生を生きる	* 人生を渡す	31.53%
22	態度を崩す	* 態度を乱す	30.63%
41	問題を扱う	* 問題を応じる	30.63%
26	関係を作る	* 関係を建てる	26.13%
14	社会を担う	* 社会を負う	25.23%
11	話題を振る	* 話題を提げる	24.32%

本研究の協力者のうち 11 名に対してインタビューをする機会を得て、参考意見ではあるが解答の理由を尋ねたところ、中国語に相当語が存在するため日中同漢字の選択肢を選んだと答えた協力者がいた。例えば、コメントのうち、7 名の協力者が中国語では［积累财产］という意味を持つので、「* 財産を積む」を選んだと答えた。5 名の協力者が中国語で［经历过历史］という意味があるので、「* 歴史を過ごす」を選んだ。6 名の協力者が［耗费时间］から、「* 時間を耗る」を選んだことが明らかになった。

4-2　中国語の漢字による負の転移に影響する要因（課題Ⅱ）

4-2-1 「日中同形同義語＋を＋和語動詞」の使用頻度による影響（仮説 2）

コーパス上の使用頻度の高さによって、各質問の平均正答率に違いがあるかを検討するために、t 検定を行った（表 3）。その結果、コーパス上の使用頻度が高いコロケーションと使用頻度が低いコロケーションの間で有意な差は示されなかった（t（22）=1.06, *n.s.*）。

表3　111名の協力者におけるコロケーションの使用頻度の高さごとの正答率

使用頻度が高いコロケーション（n = 12）	使用頻度が低いコロケーション（n = 12）
50.30%	42.49%
(18.83)	(17.06)

注　括弧内は標準偏差。

また、質問ごとの分析結果が示すように、正答率が高かった質問であっても、使用頻度が低いコロケーションが存在している。例えば、「機会を広げる」の使用頻度は、NINJAL-LWP for BCCWJ（NLB）コーパスの結果によると 13 であった。一方、正答率が低かった質問であっても、使用頻度が高いコロケーションが存在している。例えば、「話題を呼ぶ」は、使用頻度が 102 であった。

4-2-2　学習者の日本語レベルによる影響（仮説 3）

日本語能力によって平均正答率に違いがあるかを検討するため、学習者 111 名のデータについて t 検定を行った（表 4）。その結果、上級協力者と中級協力者の間で有意な差が示された（t（109）=8.15, $p < .001$）。すなわち、上級協力者の方が正答率が有意に高かったと言える。

表4　111名の協力者における日本語能力ごとの正答率

上級協力者の平均正答率 ($n = 56$)	中級協力者の平均正答率 ($n = 55$)
50.64%	31.13%
(13.57)	(11.55)

注　括弧内は標準偏差。

しかし、質問ごとに分析した結果をみると、「生活を築く、戦争を戦う、学校を去る、機能を営む」という四つの表現について、中級学習者の正答率が上級学習者より高いことが分かった（表 5）。これらのコロケーションの特徴として、全て使用頻度が低いという点が挙げられるが、それ以外の特徴は見られなかった。

表5　中級学習者の正答率が上級学習者の正答率より大きい質問

質問番号	コロケーション	上級学習者の正答率	中級学習者の正答率
2	生活を築く	33.93%	40.00%
13	戦争を戦う	35.71%	43.64%
35	学校を去る	35.71%	40.00%
37	機能を営む	17.86%	21.82%

5.　考察

111 名の協力者の平均正答率（40.97%）や学習者のコメントのデータから、中上級レベルの中国人日本語学習者にとって、「日中同形同義語＋を＋和語動詞」の習得はそれほど容易ではないと推測できるが、以上の結果をもとに、研究課題・仮説ごとの考察を行う。

まず、課題Ｉの中国人日本語学習者が「日中同形同義語＋を＋和語動詞」コロケーションを習得する上で、中国語の動詞の漢字による負の転移にはどのようなパターンがあるかについて検討する。誤用選択肢が選ばれた状況やそれぞれの比率の比較分析から、小森（2014）の結果と一致しており、仮説 1 の中国人学習者は和語動詞の代わりに、中国語の漢字を使用する傾向があるということが支持された。そのパターン以外に、中国語を日本語に訳す際に類義語である漢字の動詞を使うという転移のパターンも確認された。

一方、和語動詞の代わりに中国語の漢字が選ばれやすかった 20 問の質問について、共通の特徴は明らかにされなかったが、可能性としては以下の通りである。

まず、日本語のコロケーションに対する中国語での相当語は一つしかなく、正答である和語動詞は学習者にとって馴染みがなく、中国語の漢字で表記する動詞の共起範囲が十分に把握されていない可能性が考えられる。例としては、「財産を築く→*財産を積む、責任を果たす→*責任を尽くす、負担を免れる→*負担を避ける)」がある。これらのコロケーションは中国語ではそれぞれ［积累财产、尽责任、逃避负担］であり、相当語はそれぞれ一つしかない。また、正答である「築く、果たす、免れる」の日本語語彙レベルがすべて N1 レベルであるため、本研究の学習者にとって使用語彙でない可能性が高いと考えられる。

また、学習者が正答である和語動詞の意味範囲を理解しておらず、正誤が分からないため、馴染みのある意味のわかる中国語の漢字の動詞を適当に選択した可能性が示唆された。例としては、「会議を重ねる→*会議を復する、時間を食う→*時間を耗る、原因を作る→*原因を成す、疑問をぶつける→*疑問を提げる、目的を果たす→*目的を成す、問題をとらえる→*問題を解す、話題を振る→*話題を提げる」がある。これらの正答である和語動詞の語彙レベルはすべて日本語能力試験のレベルで判定すると級外であるにもかかわらず、多く選ばれていた。

さらに、中国語でコロケーションの相当語が見つかりにくく、文脈に合わせて、適当な中国語に訳す必要がある場合、和語動詞の代わりに中国語の漢字が選ばれる可能性がある。例としては、「学校を去る（*学校を退ける)、電話を終える（*電話を掛ける)、歴史を歩む（*歴史を過ごす)、社会を作る（*社会を建てる)、人生を捧げる（*人生を奉る)、態度を崩す（*態度を乱す)、問題を扱う（*問題を応じる)、関係を作る（*関係を建てる)、社会を担う（*社会を負う)」がある（それぞれの文脈は表 6 に示す)。

表6　中国語で相当語が見つかりにくいコロケーションとその文脈

学校を去る	友人がアイドルを目指していたが、叶わぬまま学校を（)。
電話を終える	母さんと電話を（ ）ら、すぐ彼女に電話する。
歴史を歩む	長い歴史を（ ）母校は二年前に閉校した。
社会を作る	多様性が高い社会を（ ）ければならない。
人生を捧げる	彼はガンの研究に人生を（)。
態度を崩す	どんな状況でも冷静な態度を（ ）のが一番だ。
問題を扱う	そういった問題を（ ）が心理学だ。
関係を作る	お互いになんでも言える関係を（ ）たい。
社会を担う	これからの社会を（ ）人材の育成を目指す。

「学校を去る」については、中国語の［退学］をもとに「退ける」が選ばれたことが推測される。また、「電話を終える」が「掛ける」となった理由は、中国語で「切る」は［挂断］となることから、「掛ける」と「切る」が同じ意味だと誤解し選択された可能性がある。同様に、「社会を作る」は中国語で［构建……社会］となることから「建てる」が選ばれ、「社会を担う」に関しては、社会の使命や責任を引き受けるという意味だと考え、「負う」が選ばれた可能性がある。そして、「歴史を歩む」が「過ごす」となった理由は、中国語で［经历过历史］ということが推測できる。

次に、課題Ⅱの中国語の動詞の漢字による影響は、コロケーションの使用頻度、学習者の日本語能力と関連があるか、について考察する。*t* 検定の結果から、コロケーションの使用頻度の高低の間で有意な差がなかったことから、仮説 2 の「日中同形同義語＋を＋和語動詞」の使用頻度が高い場合、母語による負の転移はコロケーションの使用頻度が低い場合より少なくなることが支持されなかった。また、質問ごとに分析した結果も同じような結論に至った。

また、*t* 検定の結果から上級協力者と中級協力者の間に有意差が示されたことから、仮説 3 の学習者の日本語レベルが高いと母語による負の転移は少なくなることが支持され、小森（2014）と森山（2015）の日本語習熟度と正答率の研究結果と一致していることが確認できた。

6. 結論及び今後の課題

以上を踏まえ、学習者が「日中同形同義語＋を＋和語動詞」を習得する際に、中国語の漢字の動詞を選ぶ可能性は、和語動詞に代わる中国語の漢字の意味、正答である和語動詞の意味範囲と難易度などの要素に影響される可能性が推測できる。一方、インタビューの結果から、学習者の個人差も確認された。例えば、11 名のうち、3 名が「* 時間を耗る」という表現は「非常に中国語らしい言い方なので」という理由で、誤答を排除できた。しかし、今回のインタビューに参加した協力者は 11 名しかいなかったので、今後の課題として、どのような場合に、学習者が和語動詞の代わり中国語の漢字を使うか、どのような場合に誤答から排除できるかについて、協力者の人数を増やし、和語動詞の意味範囲などの要因を考慮した上で、さらなる検証を行う必要がある。

また、中国語の動詞の漢字による影響は、コロケーションの使用頻度の高さによる違いが見られなかった一方で、日本語能力による影響が見られた。しかし、一部の特殊なケースについてさらなる調査の必要がある。

本研究では、中上級レベルの中国人日本語学習者の「日中同形同義語＋を＋和語動詞」の習得に焦点を当て、母語の漢字による負の転移とそれに影響する要因について検討した。次に、今後の課題に関してだが、本研究は、中国語の漢字の影響を検証するために、筆者が和語動詞と共起する名詞や助詞など、結果に影響する可能性のある要素を統制した。同形同義語は結果にどれほど影響するかを検証するために、今後は、「仕事」→［工作］や「家事」→［家务］のような「異形同義語」と共起する場合と対照する必要がある。また、母語の影響を検討する際に、英語のコロケーションの習得率とも対照しながら分析する必要がある。さらに、本稿におけるコロケーションの使用頻度はコーパスでの出

現数によって決めたが、学習者の実際コロケーションの使用頻度が日本語母語のコーパスとどれほどのズレがあるかを確認したうえで、使用頻度を再定義、またはその影響を再検討するのが課題である。

最後に、本研究の調査の結果から発見した新たな課題について述べる。対象コロケーションにおける「作る、果たす、重ねる、築く」は、異なる名詞と組み合わせた場合、平均正答率の 40.97% より高いコロケーションと、低いコロケーションがあることが確認された。特に、「機会を作る（71.17%）」と「原因を作る（10.81%）」、または「地位を築く（55.86%）」と「財産を築く（2.70%）」のように正答率の差が大きいコロケーションが存在することがわかった。このように、同じ和語動詞でも正答率に大きな差が出る理由については改めて検討する必要がある。

注

(1) 本稿では、日本語の例を「」で表記し、中国語の例を［黒体］のように表記する。
(2) 本稿における共起関係とは、単語間の結びつきの強さ、ある単語とある単語が文章中に同時に現れることを指す。
(3) 本稿における負の転移とは、母語（中国語）の漢字の転移が、和語動詞コロケーションの習得に対して悪い影響をもたらすことを指す。例えば、和語動詞コロケーションの名詞が日中同形同義語の場合、中国人日本語母語話者が和語動詞に中国語の漢字を誤用すること。
(4) 筆者は2020年1月と2月の2回に分けて、日本の大学に在籍している留学生53名（中国語母語話者 28 名、韓国語母語話者 25 名）と日本語母語話者 27 名を対象に、「同形同義語＋を＋和語動詞」を抽出して、30 問の択一式の質問紙調査を行った。その結果、中国語母語話者において中国語の動詞による影響が回答の約 3 割で見られた。また、学年が上がるにつれ母語による負の影響が軽減するという可能性は低く、学習者の国籍・地域が対象コロケーションの習得に影響を与えるという可能性も低いことが明らかとなった。
(5) 日韓中（越）同形二字漢字語データベース：韓国語または中国語を母語とする日本語学習者のために、日本語、韓国語および中国語の 3 言語で、書字が類似した二字漢字語（日韓中同形二字漢字語）の品詞情報を記録したデータベース（http://kanjigodb.herokuapp.com/）である。
(6) NINJAL-LWP for BCCWJ（略称 NLB）：国立国語研究所が構築した現代日本語書き言葉均衡コーパス（Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese：BCCWJ）を検索するために、国立国語研究所と Lago 言語研究所が共同開発したオンライン検索システムである。
(7) NINJAL-LWP for TWC（略称 NLT）は、日本語のウェブサイトから収集して構築した約 11 億語のコーパス筑波ウェブコーパス（Tsukuba Web Corpus：TWC）を検索するためのツールである。
(8) MI スコア：ある語と共起する語が与えられた際、どの程度共起語を予測できるか。一般的に、2 以上は有意な共起とみなされる。

(9) 本稿では、読解学習支援ツールの『リーディング・チュウ太』を用いて、語彙レベルを判定する。『リーディング・チュウ太』では旧日本語能力試験の出題基準にあわせて、入力した文章に含まれるすべての単語と漢字のレベル判定を行うことが可能となっている。本調査では、協力者のすべてが中国語母語話者であるため、漢字レベルは除き語彙レベルのみを判定する。

(10) BLCU Corpus Center（BCC）：中国語の大規模なコーパスである。

参考文献

許雪華（2014）「日中同形語の量的分析」『関西大学或問』26, 113-122.

小森和子（2014）「日本語学習者の語彙知識の習得に及ぼす第一言語の影響：中国語を第一言語とする日本語学習者の和語習得を通して」『明治大学国際日本学研究』6（1），91-115.

鷲見幸美（2014）「中国語を母語とする日本語学習者の和語動詞の使用：KY コーパスの分析」『言語文化論集』36（1），65-79.

文化庁（1978）『中国語と対応する漢語：日本語教育研究資料』大蔵省印刷局

森山仁美（2015）「文脈における和語動詞語彙の産出」『日本語教育』161, 2-14.

熊可欣・玉岡賀津雄（2014）「日中同形二字漢字語の品詞性の対応関係に関する考察」『ことばの科学』27, 25-51.

劉瑞利（2017）「日本語学習者の「名詞＋動詞」コロケーションの使用と日本語能力との関係ー「YNU 書き言葉コーパス」の分析を通してー」『日本語教育』166, 62-76.

Laufer, B., & Waldman, T. (2011). Verb-noun collocations in second language writing: A corpus analysis of learners' English. *Language Learning*, *61*(2), 647-672.

謝辞

本稿を執筆するにあたり、データ収集にご協力していただきました方々に、心より感謝申し上げます。

（張　名瑶―国際基督教大学）